

手話言語の「一致」試論*

川崎典子

1. はじめに

近年、世界の手話言語を対象とする言語学の研究が進んでおり、音声言語と共通の特徴、音声言語には見られない特徴が明らかにされつつある。この論文ではその中のひとつである、「一致動詞」 agreement verbs と呼ばれる類の動詞の表出形¹の選択について、音声言語との違いと共通点を明らかにする。

手話言語には、3種類の動詞があると言われている。(Padden 1988 ほか)

- (1) i. Plain verbs: 主語・目的語の指示対象が誰・何であろうと、同じ手指の形、動きで表される動詞。
- ii. Spatial verbs: 所在や移動を表す動詞。移動するもの(主題 theme)はそのものの形等を反映する手指形 CL (Classifier) で表され、移動の経路(特に着点)は語り手の手話空間の中で着点に対応する位置まで手を移動することにより示される。
- iii. Agreement verbs: 主語・目的語の指示対象が誰であるかに対応して、手指の向きや移動の方向が変わる動詞。

本稿が考察の対象とするのは、(liii) の Agreement verbs (以下、一致動詞)である。一致動詞の「一致」現象については、音声言語で(時制を担う)動詞が主語、目的語の人称・数などに応じた屈折接辞を取る「一致」と同様の現象であるとする分析が多々提案されている。数少ない例外として、市田 2005、Ichida 2010 では、これを語られる出来事と観察者の関係が関与した現象と論じている。

本稿では、手話動詞の「一致」現象について5つの特異性を指摘し、手話言語の「一致」現象が、音声言語に見られる素性照合に基づく一致ではなく、授受動詞のように話し手と出来事の関係に基づく交替現象であるという仮説に基づき5つの特異性の原因を明らかにする。第2節では、手話言語の「一致」現象を、音声言語に見られる素性照合に基づく一致現象と同種のものとする分析では説明できない5つの言語事実をあげ、問題提起を明確にする。第3章では、手話言語の「一致」現象は、音声言語に見られる授受動詞や往来動詞の交替現象と同様、視点の関わるものであるとする仮説と、最適性理論 *Optimality Theory* に基づく説明を提案する。第4章では、どうして手話言語に「一致」現象が広く観察されるかなど第2章に挙げた5つの問いが、本稿の提案する仮説によって解明されることを示す。

2. 問題提起

音声言語に見られる一致現象には、(2) に挙げた特徴がある。

(2) 音声言語の一致現象の特徴

- i. 動詞が主語・目的語と一致する言語（屈折言語）、しない言語（孤立言語）が存在する。
- ii. 動詞が主語・目的語と一致する言語では、意味や音形に関わらずすべての動詞で一致が起きる。
- iii. 動詞が主語と一致する現象の方が、動詞が目的語と一致する現象よりも広く観察される。
- iv. 一致を表す屈折接辞の表出形は、人称・数・性を同じくする人称代名詞と同形である必要はまったくない。
- v. 一致の成立に時制辞などの機能範疇が関与する。

これに対して、手話言語の「一致」現象については、これらに反する観察のほうが一般的である。

- (3) 手話言語の「一致」現象の特徴 (Rathmann & Mathur 2002, Sandler & Lillo-Martin 2006, Lillo-Martin & Meier 2011 ほか)
- i. 「一致」を持たない手話言語の存在は報告されていない。
 - ii. 手話言語の「一致」は一部の動詞でのみ観察される。「一致」を要求する動詞は、手話言語の間で意味上の共通点が多く、二重目的語を取る動詞、[+有生 animate] の目的語を取る動詞であることが多い。
 - iii. 主語との「一致」は任意であり、目的語との「一致」が義務的であることが一般的。
 - iv. 「一致」の表出形は、対応する人称代名詞と同じ空間位置・方向を用いる。
 - v. 「一致」現象に時制辞などの機能範疇の関与を伺わせる証拠がない。

したがって、手話言語の「一致」現象を音声言語の素性照合に基づく一致と同等のもののみならず分析では、以下の5つの間に対して原理的な説明を提供することはできない。

- Q1. なぜどの手話言語も「一致」現象を示すのか？
- Q2. なぜ手話言語では一部の動詞だけに「一致」が観察されるのか？ 「一致」を必要とする動詞類について、親族関係にない手話言語間に類似が見られるのはなぜか。なぜ二重目的語を取る動詞や目的語が有生である動詞に「一致」が集中するのか。
- Q3. なぜ主語ではなく目的語との「一致」がより一般的で義務的なのか？
- Q4. 「一致」の表出形が対応する人称代名詞の表出形と同じ方向に向かうのはなぜか。
- Q5. 機能範疇の関与なしに、いかなるメカニズムにより動詞の表出形の交替が起きるのか？

手話言語の「一致」現象の分析は、これらの問いに対して原理的な説明を与えるものでなければならない。本稿は、自然言語の多様性は語彙の特性に還元できるとする極小主義 Minimalism の言語研究 (Chomsky 1995 ほか) のひとつとして、これらの問いへの答えを手話言語の語彙が持つ特性からの帰結として導くことを目指す。

3. 視点に基づく交替

Ichida (2010) は、手話言語に観察される「一致」現象と日本語の授受動詞の交替現象の類似を指摘している。英語の授受動詞 *give* は動作主が誰であるかに関わらず使用されるが、日本語では話し手が動作主の場合に「やる」「あげる」、話し手が受け手の場合に「くれる」が使われる。また、往来動詞では、日英語ともに、基本的には話し手に近づく移動の場合に「来る」*come* が、そうでない場合に「行く」*go* が使用される。本節では、音声言語の往来動詞の交替の分析を示す。

中澤 (2008, 2010) は、日本語、英語、中国語、シベ語の「行く」「来る」の使用可能な文脈を以下のようにまとめている。

(4) 中澤 (2008: 126) : 「来る」が使える場合:

英語 発話時または指示時に、話し手または聞き手が目的地にいる。

日本語 動作主が話し手以外なら、発話時または指示時に話し手または聞き手が目的地にいる。動作主が話し手なら発話時に話し手が目的地にいる。

中国語 発話時または指示時に、話し手が目的地にいる。

シベ語 発話時に、話し手が目的地にいる。

原則としては、どの言語も移動の着点に話し手がいる場合 (あるいは移動物が話し手に近づく場合) に有標形「来る」を用い、それ以外の場合に「行く」を用いる。しかし、本来発話時の話し手にあるはずの視点を、聞き手

に、あるいは語られている出来事の時点（指示時）の話し手（あるいは聞き手）にシフトする可能性があり、その可能性の有無によって上記の言語差が生じているという分析を中澤（2008, 2010）は示している。すなわち、シベ語は視点のシフトを一切許さず、中国語は発話時から指示時への視点のシフトのみ許す。英語は、聞き手へのシフト、指示時へのシフトを共に許す。（日本語については後述。）

このような言語差は、音韻論で音形を決定するメカニズムとして想定される最適性理論 *Optimality Theory* によって捉えることができる。「行く」と「来る」を区別する言語では、視点 *Point-of-View* を着点とする移動は必ず「来る」に対応する語で表現される。最も簡明なのは、「発話時の話し手＝視点」の場合であるので、それに当たらない「発話時の話し手≠視点」は許容されないという制約を想定しよう。シベ語の場合は、この制約が他の関連する制約よりも強く最優先される。すなわち、この制約に反する場合には *ju*（来る）は使えず、*gene*（行く）を使うしかない。それ以外の言語も含めて説明するには、この制約の他に「指示時の話し手≠視点」「発話時の聞き手≠視点」「指示時の聞き手≠視点」はそれぞれ許容されないという制約を想定する。シベ語では、これらの制約よりも「*発話時の話し手≠視点」の制約のほうが優先度が高いため、この制約に *ju*（来る）の使用が違反する場合は、他の制約への違反・順守に関わらず *gene*（行く）が使われる。中澤が視点のシフトとしたケースは、当該言語で、いずれかの制約が「*発話時の話し手≠視点」と同じ優先度に位置づけられると想定することによって捉えることができる。たとえば、中国語は、「*発話時の話し手≠視点」に違反していても「*指示時の話し手≠視点」に違反しなければ、最終的に選ばれる候補になりうることになり、「去（行く）」と「来（来る）」が同位であれば有標の「来」が選ばれる。英語では、「*発話時の話し手≠視点」「*指示時の話し手≠視点」「*発話時の聞き手≠視点」「*指示時の聞き手≠視点」がいずれも同じ優先度を持つと考えればよい。

日本語には、次のような場合に英語との違いが観察される。

- (5) a. 今行くよ。
b. I'm coming.

中澤はさらに日本語で視点が聞き手にシフトできるケースとして、停電で困っている友人から電話があった場合に助言として「電力会社に電話をすれば誰か来てくれるよ。」と言えるという例を挙げているが、その電力会社に話し手の父親が勤務している場合は「僕のお父さんが行くことになるかもしれない。」のように「行く」が使われる。中澤が挙げている、避暑地にいる友人に「僕が行くまでには、涼しくなっているといいなあ。太郎は明日来るって？」と言うという例も、太郎が話し手の身内である場合には「太郎は明日行くって？」と言うことも可能になる。動作主が話し手自身である場合だけでなく、動作主が話し手の仲間内である（話し手の empathy（共感度）が聞き手よりも高い）場合には、聞き手の視点にシフトすることはできない。日本語は、英語のように4つの制約が対等であるのに加えて、より優先度が高い制約として「視点が話し手の empathy のより低い範囲内」であることは許されないとする制約[#]を想定すると、(5)を含めて日本語の「行く」「来る」の使い分けを説明することができる。

平安期頃までの日本語では聞き手のいる場所を着点とする話し手の移動は「来」で表されたこと、英語と同じこの使い方が現在でも鹿児島など一部の地域に残っていることはよく知られている。（近藤 2002 など）このことは、日本語で「来る」「行く」の選択を決めるメカニズムが英語の *come/go* の選択を決めるメカニズムと大きく離れるものではないこと、英語と異なる部分は他の部分とは切り離しうるシステムになっていることを示唆する。上記に挙げた日本語 vs. 英語、中古語、鹿児島方言の違いは、日本語の中央語の中で鎌倉期以降、「*視点が話し手の empathy のより低い範囲内」という制約の優先順位が視点に関わる他の制約よりも高くなったと考えることによって説明することができる。

以上、「行く」「来る」の選択に「話し手」「視点」の概念が関わっている

ことを見たが、Sells (1987) は、logophoricity (話者指示) の現象を分析する上で、Source (話し手)、Self (自己認識の主体・対象)、Point of view (POV) (視点) という3つの概念を区別するべきであることを指摘している。久野 (1978: 134-136, 1987: 207) は empathy (共感) を「文中の名詞句の指示対象に対する話し手の自己同一視化」としているが、他の者より身近に感じてその視点に立てるといふことと自己同一視することは同じではない。どんなに視点を共有していても、他者について Self-notion (自己認識: それが自分のことであるという認識 (Wechsler 2010)) を持つことはできない。本稿では、Sells の上げる3つの概念、特に POV と久野の empathy は区別されるべきものと考ええる。

手話言語の「一致」現象に話を戻そう。手話言語では、話し手は発話中の自分の姿を隠すことはできない。また、手話語彙に移動が含まれる場合、無標の動きとして話し手の身体から離れる方向に手指が動く。(Mathur 2000: 48) Source=Self=POV であり、さらに動作主がこれらと同じ者であるなら、無標の方向の動きを伴う動詞は、話し手自身が動作主として行う行為を話し手自身の視点から語っていると理解できる一方、Source=Self=POV=Agent でない場合にも、Source である話し手 (signer) の姿を隠すことはできない。さらに、手話言語は手指だけでなく上半身の姿勢、顔の各部分の筋肉、視線も言語情報を担う。特に視線は通常受信者に向けられ、受信者から視線を外す場合は、例えば独り言としての発話であることを表す。従って視線が受信者に向けられている無標の場合、発話の続く間「発信する側であるという自己認識」「自分の発信を受けている者という自己認識を相手を持っているという想定」が表現されており、認識主体としての話し手の存在は、発話が続く限り話し手・受信側の文の理解から外されることはない。

従って手話言語では、話し手と語られる出来事との間の関係、特に話し手が動詞の項に相当するのか出来事を目撃者であるのかについて、誤情報を表現してしまうことを避ける必要が出てくる。例えば、「説明する」という意味の動詞の無標形を用いると、説明したのが話し手で、説明を受けたのが話

し手以外の者であるという情報が表現されてしまう。意図する意味がこれと異なるときは、「誤情報を表現しない」という優先度の高い（語用論的）制約により無標の向き・移動方向より有標の向き・移動方向が選択されると考えられる。

手話言語の「一致」現象が自己認識を持つ認識主体の視点が関わるものであるという仮説を支持する観察がある。歩行者に自動車接近して事故直前で急停車するという出来事を語る場合、日本手話では、話し手が目撃者であったのか運転者であったのか歩行者であったのかによって異なる表現を用いる。話し手が目撃者であった場合は、一方の手で歩行者、もう一方の手で車を表し、両者がぶつかる直前で急停車を表現する。話し手が運転者であった場合は、両手で「運転する」、一方の手で歩行者の出現、両手で「急停車する」、一方の手で「急ブレーキ」を表現する。これらに対して、話し手が歩行者である場合は、利き手で「歩く」、非利き手で「歩く」を受け継ぎ、利き手で表す自動車が（非利き手で表している歩行者ではなく）話し手の顔に向かって動き急停車する。仮に、利き手で表した車が非利き手で表した人に向かう動きをすると、話し手はその出来事を目撃していたという誤情報が表現されてしまう。この場合、自動車を主語とする動詞は一致動詞ではない。しかし「一致動詞」の「一致」現象と同様、話し手と語られる出来事間の関係について誤情報を表さないように動きの方向が選ばれていると考えられる。そうであるとすれば、手話言語の動詞は予め「一致動詞」と分類され「一致」に関わる素性を持つのではなく、発話によって表現される出来事の中に話し手の視点と重なりうる認識主体が複数存在する場合に、誤情報を表さないよう「一致」現象が起きると考えるべきである。

4. 問いに答える

第2節にあげた5つの問いに対して、本稿の分析は以下のように答えることができる。

Q1. なぜどの手話言語も「一致」現象を示すのか？

音声言語では「あげる・やる」「くれる」を区別する言語と区別しない言語があるのに対して、手話言語は徹底して一部の動詞に「一致」を要求する。音声言語にとって視点の違いによる授受動詞・往来動詞の使い分けは必ずしも必要なものではない。音声言語では視点を捨象して出来事を語ることができるからである。「あげる・やる」「くれる」の区別を持つ日本語でも「(AがBに危害を)与える」のように視点に関わらず用いることができる授受動詞は存在する。一方、手話言語は、視線・顔の筋肉・上半身の姿勢など Non-Manual Marking (非手指標識) に用いる身体部位によって、認識主体としての話し手・受け手の存在が常に表現されるため、それらと語られる出来事との間の関係について誤情報を表現してしまう危険を回避しなければならない。このため、どの手話言語も、認識主体を内項に取る動詞の項と、談話に関わる認識主体との関係に応じて手指の方向を変える必要が発生する。

Q2. なぜ手話言語では一部の動詞だけに「一致」が観察されるのか？ 「一致」を必要とする動詞類について、親族関係にない手話言語間に類似が見られるのはなぜか。二重目的語を取る動詞や目的語が有生である動詞に「一致」が集中するのはなぜか。

認識主体としての話し手、受け手の存在が常に表現されることによって誤情報を表現してしまう危険が典型的に生じるのは、動詞が動作主以外に認識主体を項として取る場合である。単に移動の着点ではなく(意図された)所有者と解釈される二重目的語の間接目的語や、有生目的語を取る動詞に「一致」現象が起きるのは、それらの指示対象が認識主体となりうるからである。日本手話の「叱る」「助ける」が「一致」を示し、「読む」が「一致」を示さないのは、前者が目的語の指示対象が認識主体であることを前提として

話し手が動作主にも対象にもなり得るのに対し、後者の場合は話し手が行為の対象にはなりえず手指の方向を調整しなくても誤情報を表現する危険がないからである。

Q3. なぜ主語ではなく目的語との「一致」がより一般的で義務的なのか？

指先が向かう方向、手指の移動が向かう方向が一番調整しやすく、その方向によって（話し手、受け手を含めた）談話内の認識主体のいずれが動作の対象（目的語の指示対象）であるのかを正確に表現でき、その結果、話し手と出来事との関係を正しく表現できる。また、主語はトピックにもなりやすいため、受け手の誤解が生じにくい。

Q4. 「一致」の表出形が対応する人称代名詞の表出形と同じ方向に向かうのはなぜか。

Q5. 機能範疇の関与なしに、いかなるメカニズムにより動詞の表出形の交替が起きるのか？

手話言語の「一致」は、機能範疇との素性照合ではなく、談話情報を考慮に入れた表出形として最適な動きが選ばれるものであり、言語の計算システムの外で行われる表出形選択の結果である。指先の方向や手指の移動の方向を、談話に登場する認識主体の方向に合わせることで話し手と語られる出来事との間の関係が表現されるため、人称代名詞の指さしと同じ方向が選ばれる。

本稿では、手話言語の「一致」現象は、認識主体としての話し手 signer の存在が常に表出されているため、「一致」をおこさないと誤情報が伝わってしまうことに起因するという仮説に基づいて、この現象の特徴が説明できることを示した。手話言語が一様に目的語の「一致」を示すのは、単にそれが視覚言語であるからではなく、非手指動作により文意の一部を表現する視

線、顔の筋肉、上体の姿勢などが、話し手と語られる出来事の間接的関係を必然的に表現してしまうからである。手話言語の「一致」現象の特異性が以上のように理解されるならば、本稿で挙げた5つの違いにかかわらず、音声言語と手話言語の計算システムに異なるデザインを想定する必要はなく、また世界の手話言語が偶然同じような特徴を持つ不規則動詞を数多く持つと仮定する必要もない。

* 本稿の執筆にあたり、松岡和美氏、内堀朝子氏、市田泰弘氏ほか手話言語学研究会のメンバーおよび本間猛氏とのディスカッション、日本手話講師 小倉友紀子氏、原千夏氏、下城史江氏の授業から多くの教示を受けることができた。深く感謝申し上げます。

ⁱ 本稿では、音声言語における「音形」Phonetic Formに相当するものとして「表出形」という語を用いる。

ⁱⁱ この制約は、久野（1978）の提案する「視点の一貫性（単一の文は、共感度関係に論理矛盾を含んではならない）」に還元することができるかもしれない。

参考文献

- Chomsky, Noam 1995 *The Minimalist Program*, The MIT Press: Cambridge, MA.
- 市田泰弘 2005 「話し手の身体と視線——手話の言語学7 日本手話の文法（3）動詞の一致（再考）と指示対象のシフト」『言語』34(7), 92-99.
- Ichida, Yasuhiro 2010 'Introduction to Japanese Sign Language: Iconicity in language,' in Hirakawa, Makiko et al. (eds.) *Studies in Language Sciences* 9, Kurosio Publishers: Tokyo, 3-34.
- 近藤泰弘 2000 『日本語記述文法の理論』ひつじ書房.
- 久野暲 1978 『談話の文法』大修館書店.
- Kuno, Susumu 1987 *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*, University of Chicago Press.
- Lillo-Martin, Diane & Richard P. Meier 2011 'On the linguistic status of "agreement" in sign languages,' *Theoretical Linguistics*, 37, 95-141.
- Mathur, Gaurav 2000 *The Morphology-Phonology Interface in Signed Languages*, Ph.D. dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- 中澤恒子 2008 『『行く』と『来る』の言語比較』長谷川寿一、C. ラマール、伊藤たかね（編）『こころと言葉——深化と認知科学のアプローチ』東京大学出版会 113-127.
- 中澤恒子 2010 『『行く』時、『来る』時——直示表現の視点』東京大学言語情報科学専攻（編）『言語科学の世界へ——ことばの不思議を体験する45題』東京大学出版会 33-44.
- Padden, Carol A. 1988 *Interaction of Morphology and Syntax in American Sign Language*, Garland Publishing: New York.

- Rathmann, Christian & Gaurav Mathur 2002 'Is verb agreement the same crossmodally?' in Meier, Richard P. *et al.* (eds.) *Modality and Structure in Signed and Spoken Languages*, Cambridge University Press, 370–404.
- Sandler, Wendy & Diane Lillo-Martin 2006 *Sign Language and Linguistic Universals*, Cambridge University Press.
- Sells, Peter 1987 'Aspects of logophoricity,' *Linguistic Inquiry*, 18: 445–479.
- Wechsler 2010 'What "you" and "I" mean to each other: Person indexicals, self-ascription, and theory of mind,' *Language*, 86, 332–365.
- (nkawasak@lab.twcu.ac.jp)

キーワード

手話、一致動詞、視点、認識主体、最適性理論、往来動詞、授受動詞、極小主義